



第42号

# さらしなの里

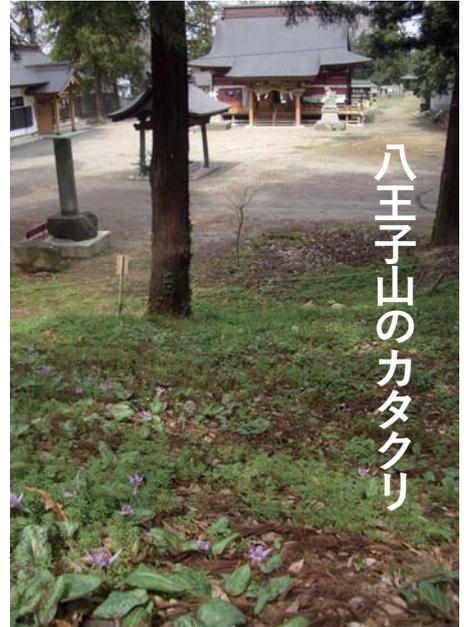
## 友の会だより



2020・春



この春も堂々と



八王子山のカタクリ



今年も3月29日に佐良志奈神社境内で、カタクリ祭りが計画されていきました。暖冬で雪もなく開花予想が難しく、例年よりも一週間早く実施することになっていましたが、新型コロナウイルス感染症拡大予防から、今年のカタクリ祭りは中止されました。

八王子山のカタクリは、平成12年の県道拡幅工事に伴い群生地が崩されることで消失する花を別の場所に移植しようと「カタクリを育てる会」が発足し、工事現場の球根や採取した種から育てた苗を神社境内の八王子山斜面に移植し順調に数を増やしてきました。カタクリは山野草で、こころ辺の山中に入ればどこにでもある春を代表する可憐な花ですが、種から花を咲かせるまでに7年以上の年月を要するため、人の手で咲かせることは至難の業です。その後、保護活動は「みどりのサポート隊」へと引継がれ、下草刈りや遊歩道の整備等を実施し、こうして八王子山のカタクリは温かく見守られてきたのです。

カタクリ祭りは22年前、公民館の茶道教室「なごみの会」が開花に合わせて野立てを行ったことが始まりで、現在は天気や衛生面を鑑みて社務所の中で抹茶と和菓子が振舞われています。地域の農産物等も販売され春のイベントとして定着してきました。残念ながら今年の祭りは中止されましたが、カタクリの花はそんなことお構いなしに堂々と咲き誇りました。

これまでカタクリの保護活動や祭りに携わった皆様方に心から感謝申し上げます。

(若宮区・佐良志奈神社宮司 豊城憲和)



さらしなの里のことを動画でも知ってもらおうというサイトができました。旧更級郡域を「さらしなの里」と呼び、千曲市を元気にしようという活動をしている「さらしなルネサンス」のホームページで、トップページのアイコン「さらしな 動画でえんJOY!」(写真の右下)です。クリックすると、ユーチューブの「さらしなルネサンスチャンネル」に飛び、見るができます。現時点では絵本「さらちゃん」

## さらしなの里を「動画でえんJOY!」

の動画版をはじめ、2019年にさらしなルネサンスが開催した「さらしな学講座」全4回がアップされています。当地が全国に知られていく大きなきっかけになった和歌「わが心慰めかねつさらしな姨捨山にてる月をみて」が詠まれたのは平安時代ですが、第1回講座では平安時代のさらしなの里人はどんな心持ちだったのかを県立歴史館元学芸部長が身振り手振りで見事にしています。第2回の姨捨の棚田のウォーキングでは、地学研究者が棚田のみならず千曲市の景観や地形の成り立ちの秘密をブラタモリに負けず劣らず分かりやすく教えてくれます。

冠着山の西側尾根筋にある古峠は、平安時代を初め古代の都人が往来した峠。第3回講座ではこの古峠から御麓区に下る古道を歩き、途中にある巨岩とそこ鎮座する観音像を紹介しています。さらしなといえはさらしなそばと連想する人が多くおり、そうしたそば愛好家向けの実演応用講座(第4回「さらしなそばでアートそば」)もアップしています。

さらしなルネサンスでは歴史、景観、自然、食文化、アートなどさまざまな分野の動画をアップしていく予定です。写真左のDVDは、2019年のさらしな学全4講座を収録したもので会員に配布。新会員にも贈呈するそうです。

リレイ  
里麗エッセイ

### 母の味

千曲市新田 石川みどり



春になり草花が青々してくると思いきすのは「母の草餅」です。四月の私の誕生日には小豆を煮て蓬を摘み、米粉を蒸して色鮮やかな草餅を作ってくれました。今の子どもたちのようなプレゼントはありませんが、母は精一杯のご馳走を用意してくれたんだと思います。そんな思い出のせいか勤めていた頃、子どもたちとの「よもぎダンゴ」作りは楽しかったです。退職後は庭に出てくる蓬を摘んで、毎年草餅を作り味わっています。

暖かくなり、二年前からお借りしている畑にナズナがたくさん出てきました。昔「お母さんのナズナのお浸しうまた方のかさつ」とを思い出して、久しぶりに摘んでみました。土の上に広がってある時は茶色っぽい葉が、

熱湯に入れるとさっと鮮やかな緑色に変わるのを見事です。春の香りとざらっとした舌触りが何とも言えません。

母は手打ちのうどんやそばもよく作っていました。「お煮かけ」は親戚などが大勢集まった時のご馳走でした。大鍋で竹輪やたつぷりの野菜を煮込みます。茹でたうどんをとうじカゴに入れ、鍋の汁で温めて具をたつぷりかけて食べます。素朴な味が懐かしいです。

お盆には饅頭も蒸かしていました。重曹で膨らませた黄色っぽい饅頭です。生まれ育った小諸(佐久地方)ではあんこが普通です。「おやき」に出会ったのは、新卒で北信地方に赴任した時です。作り方は「職場の母」に教えてもらい、今もナス・キャベツ等大好きな味を楽しんでいます。

もうすぐ九十一歳になる母は、炬燵の番をしながら「世界中を旅した気分になれるよ」と、大好きなテレビを観たり、散歩をしたりして、元気に暮らしてくれて有難いです。

# 土石流の上に暮らす更級人



この写真は、千曲市千本柳地籍の千曲川堤防から冠着山方面を見た写真です（2015年1月28日撮影）。少し雪が降ったあとでした。黒っぽい森林地域に対して、雪で白くなった裾野の地域がくつきりと見えます。

畑地、水田、人家など、人の手が入った地域は、冬でも葉のある杉や松などが少ないので、雪が少ないときは白く見えます。この白い地域は、傾斜がゆるいだけでなく、作物を作ることができる土壌が厚いところです。それに対して、写真で黒く見える森林地域は、傾斜が急で、薄い土壌しかありません。開墾しても、畑や水田にならないことを先人は経験から知っていて植林をしたのです。

この傾斜がゆるく、土壌の厚い地域で、耕作したり、井戸を掘ったりした経験のある人はご存知のように、そこには巨大な岩や太い材木が埋まっています。こんなものは、通常の洪水程度の谷川の水では運ばれてきません。大きな岩も含んだ「土石流」が谷川で発生し、運んできたの

です。

しかも、一回だけでなく、数百年に一回、それが、今までに何十回も発生し、土壌の厚い地域を作ってきました。このような土地を扇状地といいます。写真の①羽尾、②仙石、③芝原、は扇状地です。

なお、④は羽尾五区の原地区で、ここは扇状地ではありませんが、地すべり地の中で傾斜がゆるく、人が住みやすく、樹木が伐採されており白く見えます。また、⑤は堂城

山、⑥は明徳寺、⑦は更級小学校です。

さらしなの里歴史資料館は⑥のあたりにあります。左の写真は資料館の上空から撮ったもので、これも土石流に襲われたところです。資料館の東側には雄沢川が流れてくっけています。縄文人が生活していた時代以降、ここを根こそぎ流失させるような巨大な土石流には遭わなかったため、遺跡が一部残されたと思われます。

## 数百年に一度の谷川大氾濫

しかし、資料館の土台と なっている地盤は、繰り返した土石流で造られており、今後、ここが壊滅させられるような土石流が起きないという保証はありません。

土石流は予告なく起きるわけではなく、何百年に一度の豪雨が初めて起こることで、雨量をチェックして、逃げ出せば、命だけは助かります。土石流に耐える建物は作れませんから。

（羽尾四区・明徳寺住職

塚原弘昭）



佐良志奈神社

# 社標和歌作者は柳原則子さん



さらしなの里友の会の豊城巖会長が友の会だより39号で、佐良志奈神社の社標を紹介しました。この社標の側面に刻まれている和歌「月のみか露霜しぐれ雪までにさらしらせるさらしなの里」（写真下）は、さらしなという地名に純白をイメージする日本人の伝統的な美意識が凝縮されている証拠です。作者がだれか分かりました。江戸末期を生きた京都の柳原則子さんです。

柳原家は和歌をはじめ文筆の優れた家として知られています。柳原則子さんに関する史資料はまだ見つかりません。唯一の手がかりは柳原家の家系図。それによると原則子さんは、近年ではNHK連続ド

ラマ「花子とアン」で仲間由紀恵さんが演じた柳原白蓮（1885〜1967）の曾祖母に当たる女性です。白蓮は情熱的な歌風で知られ、平和運動にも尽力しました。

則子さんのおばさんの柳原安子さん



## 白蓮の曾祖母、白の美意識踏まえ

（1784〜1867）も実力のある歌人で、明治時代に編まれた『続日本歌学全書 桂園門下家集』に安子さんの歌約80首が掲載されています。「近世女流文人伝」（倉田範治著）は、安子さんの歌の特色について「桂園派のなだらかな長所だけを伝えて、その平弱におちいる弊から救われ、しかも、女らしい優美さと個性的な情熱をあわせもっている」と評価しています。桂園派は香川景樹という歌人が率いた和歌の流派。平安時代の古今和歌集を重んじ「調べの説」を唱え、清新平明に歌うことを主張しました。明治までは歌壇の主要勢力で維新後は、今の年初の皇室行事「歌会始」のものと宮内省御歌所の創設にも関わりました。

「平明で調べを大事にした流派」だったと知ると「月のみか露霜し

ぐれ雪までにさらしらせるさらしなの里」という則子さんの和歌も調べが美しく楽しくなります。

則子さんに社標和歌を作ってもらったのは、佐良志奈神社宮司の豊城直友さん。政情不安の京都に、天皇が住む御所の警護を務めるため上京し、その時に得た知遇で、高い歌の素養があるおばさんの則子さんに頼んで、さらしなにまつわる歌を作ってもらいました。佐良志奈神社にはそれを証明する文書が伝わっていました。左上の写真です。歌が料紙に7行にわたって墨で書かれ、右下の2文字が作者の名前。「子」の上の字は「則」の崩し字です。この解読は難しかったのですが、古文書研究家の北村主計さん（千曲市羽尾）が調べてくださり、ようやく判明しました。

（芝原区・大谷善邦）

この4月から、さらしなの里歴史資料館の館長を務めます市川由美子です。当館の建設時、旧戸倉町役場で教育委員会に勤務しており、当時のことを懐かしく思い出しております。今年度は寺島孝典係長が学芸員として着任いたしましたので、大変心強く思っております。

さらしなの里友の会や地元の方さま、関係者の皆さまの暖かいご理解、ご支援をいただき、頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



編集後記 今号のトップページは、この春のカタクリ祭りのレポートを豊城さんに依頼するところからスタート。しばらくしてコロナの影響で中止と連絡がありました。こういふときだから花の話題をと執筆をお願いしました。草餅にまつわる石川さんのエッセイは疲れた心身に効きそうです。石川さんも更級小に勤務経験があります。塚原さんは2月「地学でめぐる信濃三十三番札所」を出版。県内の霊場の成り立ちを地学の観点から明らかにするものだったので、「同じ観点で更級地区の成り立ち」と寄稿をお願いしました。

この4月から、さらしなの里歴史資料館の館長を務めます市川由美子です。当館の建設時、旧戸倉町役場で教育委員会に勤務しており、当時のことを懐かしく思い出しております。今年度は寺島孝典係長が学芸員として着任いたしましたので、大変心強く思っております。

さらしなの里友の会や地元の方さま、関係者の皆さまの暖かいご理解、ご支援をいただき、頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。